

## 橋下徹の「君主論」

村上 信一郎

神戸市外国語大学国際関係学科教授

### 虚構の「大阪人」

漠然とした大阪人という程度の意識なら今でもまだ存在するだろう。だが、大阪独立論を唱えるほど強烈な大阪市への一体感と土着的愛郷心（ナチス・ドイツでいう「血と土」に根差す情念）を抱く者など、もはやどこにもいないように思われる。

そもそも大阪の財界人（大半は地方出身の成功者）も、成功するや否や大阪の郊外や阪神間に競って豪壮な邸宅を築き、大阪市内に居住するものは皆無と行ってよかった。現在のパナソニックの創業者の松下幸之助（和歌山県出身）は西宮市の苦楽園に名次庵、三洋電機の創業者である井植歳男（淡路島出身）は宝塚市に井植山荘を築いた。サントリーの創業者の鳥井信治（大阪市出身）の邸宅は阪急宝塚線の雲雀丘、阪急電車や東宝の創業者の小林一三（山梨県出身）の雅俗山荘は池田市にあり、さらには天明元

年（1781年）に大坂の道修町で創業された武田薬品の武田長兵衛邸である銜艸居（かんそうきょ）でさえも神戸市の御影にあった。住友本家も茶白山本邸に造園した慶沢園を大阪市に寄贈したのち1921年には神戸の住吉本邸に転出した。

もつとのちのことになるが、バブル経済による東京一極集中のうねりに逆らうことができず、大阪の大企業のほとんどは本社機能を事実上東京に移すことになった。2007年に第13代関西経済連合会の会長に就任した下妻博・住友金属会長が東京圏の居住者であったことが如実にそのことを物語っている。

2011年11月27日の大阪市長選挙では、橋下徹が75万票を獲得、平松邦夫に23万票もの差をつけて圧勝した。ところが当の橋下徹その人が大阪市民ではなく、妻や公立小中学校に通う3男4女の子供たちとともに、地下鉄御堂筋線が延伸された北大阪急行の緑地公園駅近くのマンションで暮らす豊中市民だった。大阪市の人口は267万人だが昼間人口は366万人に増え、大阪都市圏の人口は1212万人に達する。たとえば阪神タイガース・ファンといった形でローカル・アイデンティティを再確認することがあるにせよ、もはやそれは「血と大地」とは無縁の、商業メディアによって人為的に増幅された希薄な疑似アイデンティティに過ぎない。タイガースが優勝して興奮のあまり道頓堀川に飛び込むのが関の山で、そこに命を賭けるようなものは何一つない。

#### むらかみ しんいちろう

神戸大学大学院法学研究科博士課程修了（法学博士）。

専門分野は政治学、ヨーロッパ現代政治。

著書に、『民主党政権は何をなすべきか』（岩波書店、2010年）、『イタリア20世紀史』（翻訳、名古屋大学出版会、2010年）、『幻影のローマ』（青木書店、2006年）など（ともに共著）。

## 「大阪弁」は大阪アイデンティティの根拠となるか

橋下徹が暮らす北摂地域や千里ニュータウンでは、ある種の東京コンプレックスとスノビズムから、イントネーションやアクセントには関西なまりの痕跡が残るものの、基本的には標準語が用いられている。かつての全共闘運動の活動家のアジ演説がそうであったように、橋下徹（戸籍上の出生地は東京都渋谷区幡ヶ谷で5年生まで在住）の語り口がそれに該当する。わずか15秒で発言をまとめなければならないテレビ・バラエティー番組で大阪弁は使えない。ただし罵詈雑言のための単語やフレーズは別である。お笑い芸人がテレビでしゃべっているのは大阪弁ではない。ステレオ・タイプ化された「役割語」としての大阪弁だ（藤山寛美が演じる丁稚の大阪弁やテレビでよく耳にする坂本竜馬の土佐弁や西郷隆盛の薩摩弁も同じだ）。

今東光（1898年横浜生まれ－1977年）が大阪府八尾市の天台院住職を務めながら著した『悪名』（1960年に週刊朝日に連載、翌年、勝新太郎主演で映画化）を始めとする一連の河内もの任侠小説のおかげで、「おんどれ、なにぬかしてけっかんねん、いてこましたるか!」といった河内弁が一世を風靡した。そのため、まるで大阪弁そのものがヤクザ言葉のごとく見なされてしまうことになった。岡部伊都子や田辺聖子が連綿と受け継いできた谷崎潤一郎の『細雪』に見られる、たおやかな船場言葉など、まるで存在しなかったかのように。

それはともかく大阪弁という方言は、かりに河内方言や和泉方言を含めたとしても大阪人の土着的アイデンティティの根拠とはなりえない。橋下新市長も、教育方針の決定権が首長にあるといっても、スペインのカタルーニャ州のように方言（大阪弁）を学校教育で義務化するほどの地域分離主義者ではないようである。幸いなことにETA（バスク祖国と自由）のごとき武装テロ路線はまだ眼中にない。

橋下ブレーンで慶応大学教授の上山信一が唱え

る大阪独立論は噴飯ものである（『大阪維新』角川SSC新書）。「平成の倒幕運動」などよくいえたものだ。武装テロリズムや内戦の扇動ではないか。幕末の志士のように新撰組に暗殺されたいのか。天皇陛下がおわします皇居を攻め落とす武器はどの国から調達するのか。東京都庁に陣取る石原軍団と核武装して対決するとでもいうのだろうか。それとも大阪維新はたんなる言葉の遊びなのか。本気にする奴がバカなだけなのか。なら、そんなバカを言うな。

## 「最も危険な政治家」橋下徹研究

これは『新潮45』2011年11月号の表紙に記された文言である。「20人の証言者！カギっ子少年が『権力』を掴むまで。瞬発力とご都合主義の扇動者！カメレオン『橋下徹知事 変節の半生』」（『週刊新潮』同年11月10日号）。「『大阪都抗争！』殺るか、殺られるか 橋下徹 母の独白90分『疑いを持たれる人と一緒になった私が悪い』」（『週刊文春』同年11月10日号）。

文藝春秋社や新潮社の右翼的姿勢とスキャンダリズムについては夙によく知られたことでもあり、私も驚かない。だが、突然降って湧いたこの異様なネガティブ・キャンペーンの背後には一体誰がいるのか。はたして中曽根康弘や讀賣新聞主筆の渡邊恒雄のような黒幕がいるのか。東京電力・福島原発事故以来、パワー・エリート論は現代政治学<sup>1</sup>に必須のパラダイムとして復権した。アメリカ政治学から直輸入された機能主義的かつ予定調和的な政財官メディアからなる多元主義モデルは自民党一党優位体制の崩壊とともに失効した。サリンを撒いたのは匿名のメカニズムではなかった。橋下徹は絶対に通さないと決意した誰かがいるのだ。

ざりとて、恐怖政治に怯える大阪市の職員組合や地下鉄民営化を恐れる交通局の労組が仕掛けた陰謀とは考えにくい。そんな力は彼らにはない。文春や新潮<sup>2</sup>を使<sup>し</sup>喚<sup>そ</sup>うできるほどの力があるとすれば考えられるのは財界ぐらいだ。ちなみに関西財界御三

家とは関西電力・住友金属・パナソニックを指す。2011年5月から住友金属の下妻博に代わって関電の森詳介が関経連会長に就任した。関電の筆頭株主は8.9%の株を所有する大阪市である。本気かどうかまだ怪しいが橋下徹は市長選で脱原発を公約にした。2012年6月の関電株主総会で株主権を行使するという。原発を死守したい関電にとって橋下徹は不倶戴天の敵となった。

そうすると橋下徹は関西財界を敵に回して戦う「体制維新」の革命児なのか。そんな単純な話ではない。大阪都構想は関西財界が唱えてきた道州制論のヴァリエーションにすぎず、大阪府と市の二重行政の見直しも関西経済同友会が2002年以来提唱していることの焼き直しでしかない。堺屋太一が応援しているのも橋下徹が関西財界の考える改革構想のエージェントである証拠だ（橋下徹・堺屋太一『体制維新一大阪都』文春新書。なんと文藝春秋が発行元!）。

大阪府の5兆円もの債務は府や財界が主導した巨大プロジェクトの破綻から生じたもので、大阪府庁の件費のせいではない。だが橋下徹は大阪府知事に就任するや否や、大阪府は「破産会社」だと宣告して職員給与や退職金の削減を強行した。橋下徹は財界の失敗を隠蔽し免責する使い勝手のよいデマゴーグとして登場した。関経連会長の下妻博も知事当選直後には「橋下知事を教育する」と述べていたほど、橋下徹と関西財界の関係は蜜月状態にあった。

だが大阪府民から183万票（得票率54%）を得て「白紙委任状」を手にしたと信じる橋下徹は、大枠では財界との同盟を維持しつつも、次第に自律性の度合いを強めていく。そして原発で財界はついに「飼いや手や噛まれる」歯目に陥った。大阪北ヤード再開発でも財界案をご破算にするといわれる始末である。まるでヒトラーのナチ党と、抱き込みを図ったドイツ保守層との駆け引きを見るようである。被差別民と蔑視した財界に対する橋下徹の怨念は深い。

## ネガティブ・キャンペーンの空回り

『新潮45』によると、橋下徹の実父、橋下之峯（はした・ゆきみね）は八尾市安中の被差別部落出身者で暴力団・土井組の組員となり最後はガス自殺したとのことである。ネガティブ・キャンペーンが煽った新事実はそれだけだ。だからどうだというのだ。被差別部落出身者と暴力団を短絡させる悪質なデマとしかいいようがない。野田正彰のような精神科医までもが同誌に寄稿して、橋下徹が「病気」（自己顕示欲型精神病質者ないし演技性人格障害）と決めつけるのは、それこそ狂気の沙汰だ。というか、橋下徹には屁の河童である。

橋下徹自身5年生のときに東京を離れ、新大阪に近い飛鳥という同和地区に暮らしはじめたことを隠していない。むしろ茶髪にジーンズの弁護士として名前を売ったタレント候補である橋下徹は、母子家庭に育ったことや、北野高校の同級生である糟糠の妻や、3男4女の子沢山であることとあわせて、同和地区との結びつきも、選挙運動上好都合なセールスポイントと考えていた節がある。

事実、橋下徹は最愛の妻のプライバシーでも、次のように平気で引き合いに出す男なのだ。

「人間そんなに清廉潔白なのかよ！ そりゃ、付き合い始めのころは寝ても覚めてセックスのことばかり、だけど、やってることなんて、しょせん、単調な動作の繰り返しだからね。まあ30回もやりゃ飽きがるでしょう。となると、『工夫』というのが重要になる。あの手この手を考える。これが夫婦円満の秘訣だよ。僕の妻は高校の同級生で、もう20年間ものつきあい。それで子供が6人もいるということは、それこそ芸術的なアイデアをフル展開させている。制服でしょ、部活のテニスのユニフォームでしょ、その他いろいろ」（橋下徹『まっとう勝負!』小学館、2006年）。

橋下徹をタレント弁護士として世に送り出した島田紳助ややしきたかじんのような大阪のお笑い芸人

は、露骨で卑猥な「政治的に正しくない」差別用語や放送禁止用語を乱発しつつ他人の偽善を暴いて攻撃する本音トークが身上である。それだけではなく自分のプライバシーをとことんまで露出する。それで自分が笑われても笑いで切り返すだけの瞬発力が必要だ。その構造はいじめの世界にも似ている。チビ、デブ、ハゲといわれて、めげているだけでは駄目なのだ。ツッコミを入れるか、自分をネタにしたボケかのバトル・ロワイヤルなのである。

## トオルくんの『君主論』

橋下徹は自分でもここまで偉くなれると思っていなかったであろう。おそらく今となればこの世から葬り去りたいと考えているにちがいない若書き？の著書が何冊かある。その一冊が『最後に思わずYESと言わせる最強の交渉術』（日本文芸社、2003年）だ。本書から何行か抜粋してみよう。

「第2章 まんまと相手を言いくるめる逆転の交渉術—ありえない比喩、立場の入れ替え、相手を錯覚に陥れる詭弁の極意。一度オーケーしたものを“ノー”にしてこそ勝機がみえる」。

「第4章 自分の土俵に引きずり込む話術のポイント—一言い訳、うそ、責任転嫁、攻撃をかわし、相手をたたみこんでいく実践論。標準語と方言を状況に応じて使い分ける。相手に考える間を与えないテクニック。感情的な議論をふっかけて交渉の流れを変える」。

もう十分だろう。あぁいえば上祐という橋下徹流レトリックの真髓がここに凝縮されている。彼が日本の宰相にでもなればマキャヴェッリの『君主論』やヒトラーの『我が闘争』にも匹敵する書物といわれるようになるかもしれない。少なくとも大阪維新の会「維新政治塾」の必読文献となるのは間違いない。

しかし、私がいちばん瞠目したのは『どうして君は友だちがいないのか—14歳の世渡り術』（河出書房新社、2007年）である。ところで、茶髪の大学教授として、女子高生と援助交際をしたりテレクラにハマッ

たりしたのち20歳年下の東大名誉教授の娘と再婚した宮台真司にも、当時2歳の愛娘のために書いた『14歳からの社会学』（世界文化社、2008年）という著作がある。帯には「学校じゃ学べない「社会の本当」を語ろう」とあるが、野獣系でいこうと称してあれほど不良を真似る体験をしてきたというのに、なんだやっぱり麻布—東大じゃんと思わざるをえないほどブッキッシュで、リアリティが希薄である。自分の体験から沁み出てきた言葉が一つもないのだ。

それと比べれば『どうして君は友だちがいないか』は、自分の体験にもとづいて凄いいことが書かれている。橋下徹が教育に熱心なだけにととても興味深い。

「君はともだちがいないことで悩んでいませんか。はっきり言いましょ。そんなふうには思いません。友だちなんて、そもそもが役に立たない存在です。たとえ、いなくても君はなにも困ることはありません。つまり損をすることがあっても、得られるメリットは特にない。いっしょにいるからといって、特になにかをあててもらえることもない。それが友だちというものです」。

「長くつきあえる友だちなんていない。そう言っている僕も、実は中学生のころには、いまつきあっている友だちとはこれからも長くつきあっていける、そんなふうには思っていました。しかし、ふり返ってみると、それが間違いだったことがよくわかります」。

「僕は2回、転校を経験しています。転校するたびに、長くつきあえる友だちに出会えるかもしれないと期待したけれど、それまでとにも変わらない」。

しかし14歳の処世術の真髓はそんなことにあるのではない。転校を繰り返したトオル少年がイジメにあうのは必然的な成り行きといえよう。さて、こんなつらい毎日を乗り越えるために、トオルくんが取った方法とはどんなものか。

「僕が選んだのは、強い者についていくという方法でした」。

「強いところについていく、強いグループに組み

こまれるというのは、具体的には周囲の力関係を見ながら、ジャイアンのような強い子についていくという方法です。もっとわかりやすく言うと、スネ夫のような生き方といえよいでしょうか。君はスネ夫的生き方を卑怯だと思いませんか」。

「力関係を利用するなんて卑怯なやりかただ、なんていう思い込みをまず捨てませんか。せっかくそこに力関係があるんだったら、うまく使ったほうがいい。それが知恵というものです」。

最後にもう一つ、窮極の処世術を紹介することで本稿を閉じることにしたい。

「自分が絶対にいじめや無視の対象になりたくないのだとすると、どんなにいじめには荷担したくないと思っていたとしても、荷担しなければ君がいじめられたり無視されそうならば、いじめに同調するしかない」。

こんなスネ夫がジャイアンになるとき、一体日本はどうなっているのでしょうか。■

(文中敬称略)

